京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2010-2

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　二〇一〇―二
上京遺跡

上　京　遺　跡

2010 年

財団法人　京都市埋蔵文化財研究

財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

上　京　遺　跡

2010 年

財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

序　　文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、昭和 51 年（1976）設立以来、これまでに市内に点在する数多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた京都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様に京都の歴史に対し、関心を深めていただけるよう努めております。

このたび、老人ホーム建設に伴う上京遺跡の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきまして御意見、御批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際して御協力ならびに御支援たまわりました関係各位に厚く感謝し、御礼申し上げます。

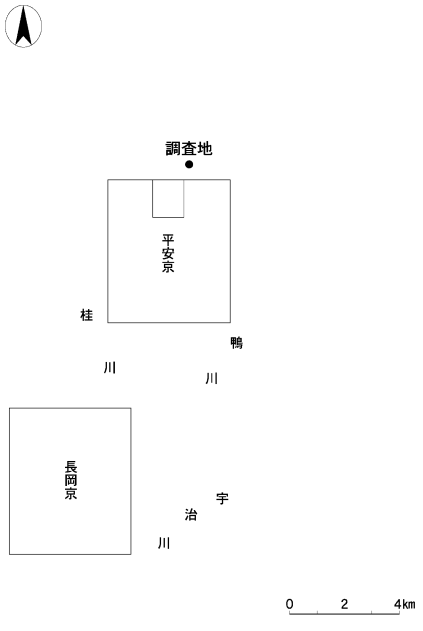
平成 22 年 6 月

財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

所　長　　川　上　　貢

例　　言

1	遺　跡　名	上京遺跡
2	調査所在地	京都市上京区堀川通上立売下る北舟橋町 860-1、860-3、 今出川通大宮一丁東入北猪熊町 295、297、305
3	委　託　者	滋賀喜織物株式会社　代表取締役　岩佐　譲
4	調 査 期 間	2010 年 4 月 19 日～ 2010 年 5 月 14 日
5	調 査 面 積	約 180 ㎡
6	調査担当者	布川豊治
7	使 用 地 図	京都市発行の都市計画基本図（縮尺１：2,500）「船岡山」を参考にし、作成した。
8	使用測地系	世界測地系　平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（ｍ）を省略した）
9	使 用 標 高	T.P.：東京湾平均海面高度
10	使用土色名	農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』に準じた。
11	遺 構 番 号	通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
12	遺 物 番 号	通し番号を付し、写真番号も同一とした。
13	本 書 作 成	布川豊治
14	備　　考	上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。



（調査地点図）

目　　次

１．調査経過 …… 1
２．調査地の位置と環境 …… 2
（１）位置と環境 …… 2
（２）既往の調査 …… 2
３．遺　　構 …… 4
（１）基本層序 …… 4
（２）遺構の概要 …… 4
（３）室町時代後期（16 世紀中葉）から江戸時代初期（17 世紀初頭）の遺構 …… 4
（４）江戸時代の遺構 …… 10
４．遺　　物 …… 12
（１）出土遺物の概要 …… 12
（２）室町時代後期（16 世紀中葉）から江戸時代初期（17 世紀初頭）の土器類…… 13
（３）江戸時代の土器類 …… 14
（４）瓦類 …… 15
（５）その他の遺物 …… 15
５．ま と め …… 16

図　版　目　次

図版１　遺構　１　調査区全景（西から）
２　柱穴列（柱穴 39 ～ 42・47、北西から）
図版２　遺構　１　土坑 12（北から）
２　土坑５（北から）
３　柱穴 46（北から）
４　柱穴 46 断面（西から）
５　土坑 23（北から）
６　礎石列（柱穴 43・44、北から）
図版３　遺物　出土遺物

挿　図　目　次

図１　調査地位置図（１：2,500）　……　1
図２　調査前全景（北から）　……　2
図３　作業風景（北から）　……　2
図４　調査区配置図（１：500）　……　3
図５　調査区断面図（１：100）　……　5
図６　室町時代後期（16 世紀中葉）から江戸時代初期（17 世紀初頭）遺構平面図（１：100）……
6
図７　江戸時代遺構平面図（１：100）　……　7
図８　土坑 14 断面図（１：50））　……　8
図９　溝 28・29 断面図（１：50）　……　8
図 10　土坑 10 断面図（１：50）　……　8
図 11　土坑５断面図（１：40）　……　9
図 12　土坑 12 実測図（１：40）　……　9
図 13　柱穴列・溝 25 実測図（１：50）　……　9
図 14　土坑 23 実測図（１：50）　……　10
図 15　礎石列実測図（柱穴 43・44、１：40）　……　11
図 16　柱穴 46 実測図（１：40）　……　11
図 17　土坑４（東から）　……　11
図 18　室町時代後期（16 世紀中葉）から江戸時代初期（17 世紀初頭）の土器実測図（１：４）……
13
図 19　江戸時代の土器実測図（１：４）　……　14
図 20　瓦類拓影・実測図（１：４）　……　15
図 21　硯実測図（１：２）　……　15
図 22　ハバキ実測図（１：２）　……　15
図 23　銭貨拓影（１：１）　……　15
図 24『洛中絵図　寛永後万治前』と調査地　……　17

表　目　次

表１　遺構概要表　……　4
表２　遺物概要表　……　12

上　京　遺　跡

1．調査経過

調査地は、京都市上京区堀川通上立売下る北舟橋町、および同今出川通大宮一丁東入北猪熊町に位置する。この場所に今般、「(仮称）たのしい家堀川今出川」の建設が計画された。

当地は上京遺跡に該当していたため、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「京都市文化財保護課」という。）が試掘調査を実施した。その結果、中世から近世の遺構が良好に遺存することが確認された。これらの成果を受けて、発掘調査を実施する運びとなり、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受け、実施した。

発掘調査は、2010 年４月 19 日から５月 14 日まで実施した。調査区は、試掘調査の成果から中・近世遺構の残存状況が良好な敷地の南東部に東西約 15 m、南北約 12 mの規模で設定した。中世の遺構を検出することに重点を置き、現代から江戸時代の地層を機械掘削し、室町時代の遺構面を検出した後、人力による作業を行った。この上面で室町時代後期（16 世紀中葉）から江戸時代の土坑・溝・礎石・柱穴列などを検出した。順次、遺構を掘削し、図面作成・写真撮影などの記録を行い、その後、器材搬出および埋め戻しを行い、調査を終了した。

なお、調査中に適宜、京都市文化財保護課の検査・指導を受けた。

図１　調査地位置図（１：2,500）

２．調査地の位置と環境

（１）位置と環境

調査地は、南を今出川通、西を猪熊通、東を堀川通、北は山名町を貫く東西通（旧山名辻子）に囲まれた範囲のほぼ中央に位置する。平安京が造営された時、京外となる調査地付近は計画的な開発はなされなかった。しかし、左京に人家が集りはじめると、平安時代後期頃から京域を越え、京の北郊に開発が及ぶようになった。中世に入ると、さらに市街地化が進み、調査地近隣の猪熊通や堀川通を含め、左京の南北通が北へ延長され、山名辻子のような東西通もできていった。そして、室町時代後期には室町小路を中心に「上京」といわれる町ができ上がった。

上京遺跡は、この「上京」の遺跡であり、その範囲は、北は上御霊前通、西は智恵光院通、東はほぼ烏丸通、南は一条通に囲まれた約１㎞四方に及ぶ。また、室町幕府三代将軍足利義満によって建立された相国寺旧境内、永徳元年（1381）足利義満による造営の室町殿跡（花の御所）、五摂家の一つ近衛家の別邸（桜御所）跡を中心とする新町校地遺跡、本満寺の構え跡、九条実経の邸宅跡で大永年間（1521 ～ 1528）に一条家の所有となった一条室町殿跡などの遺跡は、上京遺跡内に含まれるか隣接する遺跡である。

調査地は上京遺跡の中央部西寄りに位置し、北隣は山名宗全の屋敷推定地、調査地一帯は本阿弥家所領地であり、南西には上杉本洛中洛外図屏風に見える「北船橋」があったとされる。また、このあたり一帯を西陣と呼称するが、これは応仁の乱で山名宗全らの西軍がこのあたりに陣を置いたことが由来である。西陣は、近世には絹織物の一大生産地となった。

（２）既往の調査

調査地周辺では発掘調査は実施されていないが、上京遺跡としては２箇所実施されている。１箇所は、上京遺跡の中央部北寄りに位置する表千家不審庵敷地内であり、室町幕府の細川典厩家邸宅推定地である。2004 年に当研究所によって発掘調査が実施され、平安時代の溝、鎌倉時代の柵列・塀・井戸・土坑、江戸時代の土坑などを検出している。

図２　調査前全景（北から）

図３　作業風景（北から）

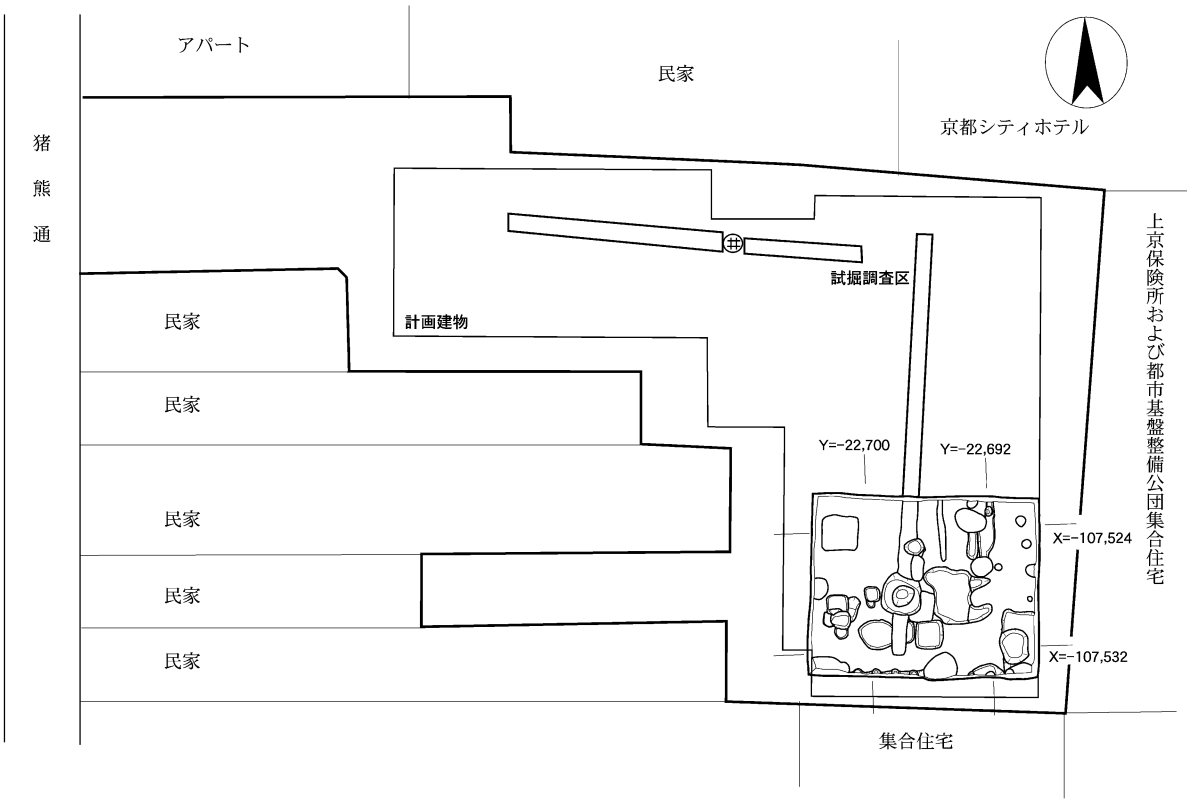


図４　調査区配置図（１：500）

２例目は１例目の北西約 80 mに位置し、裏千家今日庵敷地内であり、2005 年に当研究所が発掘調査を行い、室町時代後期の溝・井戸・土坑、江戸時代の石室・井戸・土坑・埋納遺構などを検出している。

引用文献

横山卓雄『京都の自然史』（株）京都自然史研究会　2004 年

『京都の地名』 平凡社　1979 年

『史料　京都の歴史　第７巻　上京区』 平凡社　1980 年

足利健亮『京都歴史アトラス』 中央公論社　1994 年

『京都市遺跡地図台帳』【第８版】 京都市文化市民局　2007 年

吉崎　伸『上京遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-9　2004 年

長戸満男「上京遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成 17 年度』 京都市文化市民局　2006 年

3．遺　　構

（1）基本層序

現地表面の標高は約 56.3 mである。基本層序は、地表面から約 0.2 mまでが現代盛土である。以下、第 1 層は黒色砂泥（厚さ 0.15 ～ 0.25 m）で近世から近代の耕作土である。第 2 層は黒褐色砂泥（厚さ 0.15 ～ 0.25 m）で近世層である。第 3 層は暗褐色砂泥（厚さ 0.2 ～ 0.25 m）で締まりのある近世の整地層である。第 4 層は黒褐色砂泥で径 0.1 ～ 0.3 mの礫が多く混じるいわゆる地山である。遺構面としての調査は、第 4 層上面で行った。遺構面の標高は、調査区北壁では 55.4 ～ 55.7 m、南壁では約 55.2 mであり、調査区南側へ下る。

（2）遺構の概要

検出した遺構は、室町時代後期から江戸時代のものがあり、総数は 49 基である。これらを室町時代後期（16 世紀中葉）から江戸時代初期（17 世紀初頭）とそれ以降の江戸時代とに分け、主なものを記述する。室町時代後期から江戸時代初期の遺構としては、土坑、溝、柱穴列（柱穴 5 基）などがある。江戸時代の遺構としては、土坑、溝、礎石などがある。なお、遺構番号は、掘削順に付したため前後する。

（3）室町時代後期（16 世紀中葉）から江戸時代初期（17 世紀初頭）の遺構（図 6）

土坑 14（図 8） 調査区中央部東側で検出した。検出規模は東西約 3 m、南北約 3.8 m、深さ約 0.3 mを測り、不定形である。埋土は暗褐色～黒褐色砂泥である。16 世紀中葉の土師器皿が多く出土した。

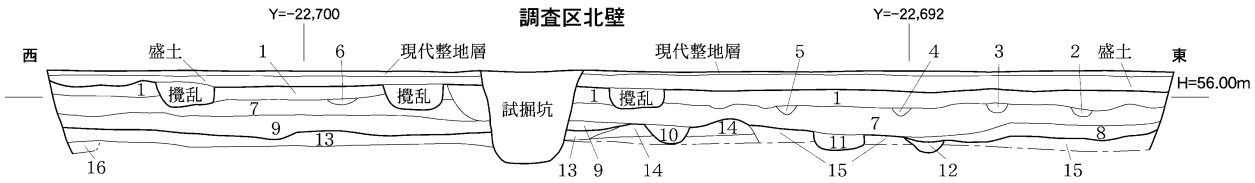
土坑 15　土坑 14 の南東部に接して検出した。検出規模は東西約 1.6 m、南北約 1.2 m、深さ約 0.15 mを測り、不定形である。埋土は黒褐色砂泥である。少数の 16 世紀中葉の土師器皿が出土した。

土坑 16　土坑 14 の北東部に接して検出した。検出規模は長辺が約 1.3 m、短辺約 1.1 m、深さ約 0.15 mを測り、三角形状である。埋土は暗褐色砂泥である。土師器小片が出土した。

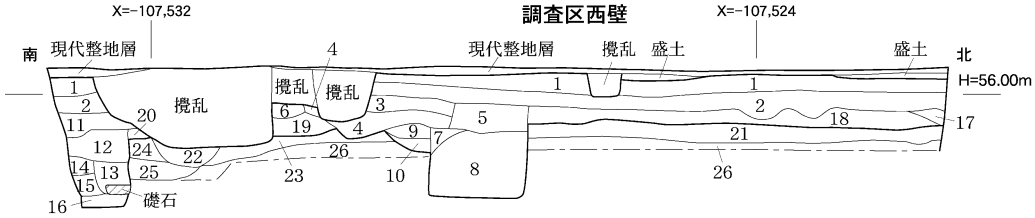
土坑 14 ～ 16 は、切り合い関係が不明瞭で、出土土器はほぼ同時期である。

表 1　遺構概要表

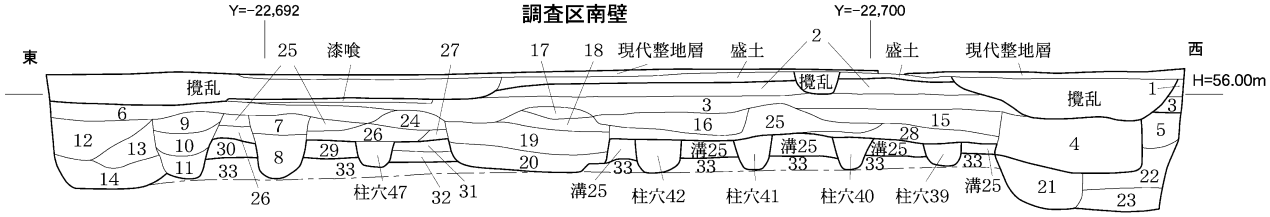
時　　代	遺　　構	備　　考
室町時代後期 ～江戸時代初期	土坑 5 ・ 7 ～ 8 ・10・12～16・22・33・35～38、 溝25・28・29、柱穴列（柱穴39～42・47）	実年代では16世紀中葉～17世紀初頭である
江戸時代	土坑 1 ・ 2 ・ 4 ・23・26・27・32、溝 6 、 礎石列（柱穴43・44）、柱穴46	



1　10YR2/1 黒色砂泥　土師器微量混（耕作土）
2　10YR2/1 黒色砂泥　土師器微量混（耕作溝）
3　10YR2/1 黒色砂泥　土師器微量混（耕作溝）
4　10YR2/1 黒色砂泥　土師器微量混（耕作溝）
5　10YR2/1 黒色砂泥　土師器微量混（耕作溝）
6　10YR2/1 黒色砂泥　土師器微量混（耕作溝）
7　10YR2/2 黒褐色砂泥　炭･土師器少量混
8　10YR3/2 黒褐色砂泥
炭･土師器少量混（近世整地層）
9　10YR3/3 暗褐色砂泥　炭･土師器少量混（近世整地層）
10　7.5YR3/2 黒褐色砂泥（溝6）
11　7.5YR3/3 暗褐色砂泥
径3～10㎝の礫中量、土師器少量混（土坑31）
12　7.5YR3/2 黒褐色砂泥
径3～5㎝の礫少量、炭･土師器微量混（溝28）
13　7.5YR2/2 黒褐色砂泥（地山）
14　7.5YR3/2 黒褐色砂泥　径2～4㎝の礫少量混（地山）
15　10YR3/3 暗褐色砂泥（地山）
16　7.5YR4/3 褐色砂泥　径4～8㎝の礫少量（地山）



1　10YR2/1 黒色砂泥　土師器微量混（耕作土）
2　10YR2/2 黒褐色砂泥　炭･土師器少量混
3　10YR3/1 黒褐色砂泥　径3～5㎝の礫少量混
4　7.5YR1.7/1 黒色シルト（炭層）
5　10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥　炭･土師器少量、
径2～5㎝の礫少量混
6　10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥　土師器微量混
7　10YR3/1 黒褐色砂泥　径3～10㎝の礫多量混（土坑４）
8　7.5YR3/2 黒褐色砂泥　径6～20㎝の礫多量混（土坑４）
9　7.5YR3/3 暗褐色砂泥　炭大量混
10　10YR3/2 黒褐色砂泥　径3～10㎝の礫多量混
11　10YR4/6 褐色砂泥　土師器微量混
12　7.5YR2/3 極暗褐色砂泥　径1～5㎝の礫中量混（土坑１）
13　10YR3/3 暗褐色砂泥（土坑１）
14　7.5YR2/3 極暗褐色砂泥　径5～15㎝の礫多量混（土坑１）
15　10YR3/2 黒褐色砂泥（土坑１）
16　10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥　径5～10㎝の礫中量混（土坑１）
17　10YR3/3 暗褐色砂泥　炭･土師器少量混（近世整地層）
18　10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥　炭･土師器微量混（近世整地層）
19　10YR4/6 褐色砂泥　土師器微量混（近世整地層）
20　7.5YR3/2 黒褐色砂泥（近世整地層）
21　7.5YR2/2 黒褐色砂泥（地山）
22　10YR2/2 黒褐色砂泥　径2～6㎝の礫少量、炭微量混（地山）
23　10YR3/4 暗褐色砂泥（地山）
24　7.5YR3/4 暗褐色砂泥（地山）
25　7.5YR4/3 褐色砂泥（地山）
26　7.5YR4/3 褐色砂泥　径4～8㎝の礫少量混（地山）



1　10YR2/1 黒色砂泥　土師器微量混（耕作土）
2　10YR3/1 黒褐色砂泥　径3～5㎝の礫少量混（耕作土）
3　10YR2/2 黒褐色砂泥　炭･土師器少量混
4　10YR3/3 暗褐色砂泥　瓦･土師器微量混
5　10YR4/6 褐色砂泥　土師器微量混
6　7.5YR3/2 黒褐色砂泥　土師器微量混
7　7.5YR3/2 黒褐色砂泥　径3～5㎝の礫中量、
炭･土師器微量混（土坑49）
8　7.5YR3/2 黒褐色砂泥　径5～20㎝の礫多量、
土師器微量混（土坑49）
9　10YR4/4 褐色砂泥　炭微量混（土坑48）
10　10YR4/2 灰黄褐色砂泥　炭･土師器微量混（土坑48）
11　10YR4/2 灰黄褐色砂泥（土坑48）
12　10YR3/3 暗褐色砂泥　瓦少量混（土坑32）
13　7.5YR3/3 暗褐色砂泥
上部炭層ブロック、土師器少量混（土坑32）
14　10YR3/2 黒褐色泥砂
径4～10㎝の礫中量・土器混（土坑32）
15　10YR4/6 褐色砂泥
16　10YR2/1 黒色砂泥　炭･土師器多量、瓦少量混
17　10YR3/2 黒褐色砂泥　炭･土師器中量混
18　10YR3/3 暗褐色砂泥～7.5YR4/3 にぶい黄褐色シルト
炭･土師器少量混
19　10YR3/2 黒褐色砂泥～7.5YR4/3 にぶい黄褐色シルト
径2～5㎝の礫少量混（土坑２）
20　7.5YR3/3 暗褐色砂泥　径3～10㎝の礫中量、
土師器少量混（土坑２）
21　10YR3/4 暗褐色砂泥　炭･土師器微量混（土坑１）
22　10YR3/3 暗褐色砂泥　炭･土師器少量混（土坑１）
23　10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥　炭･土師器微量混（土坑１）
24　10YR3/3 暗褐色砂泥　炭･土師器微量混
25　7.5YR3/3 暗褐色砂泥（近世整地層）
26　10YR3/3 暗褐色砂泥　径3～6㎝の礫少量、
炭･土師器少量混（近世整地層）
27　10YR4/4 褐色砂泥　土師器微量混（近世整地層）
28　10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥　炭･土師器少量（近世整地層）
29　7.5YR4/3 褐色砂泥　径4～8㎝の礫中量混（土坑13）
30　7.5YR4/3 褐色砂泥　径3～8㎝の礫中量混（土坑13）
31　7.5YR4/3 褐色砂泥
32　7.5YR4/3 褐色砂泥　径3～8㎝の礫中量混
33　7.5YR4/3 褐色砂泥　径4～8㎝の礫少量混（地山）

0　5 m

図５　調査区断面図（１：100）

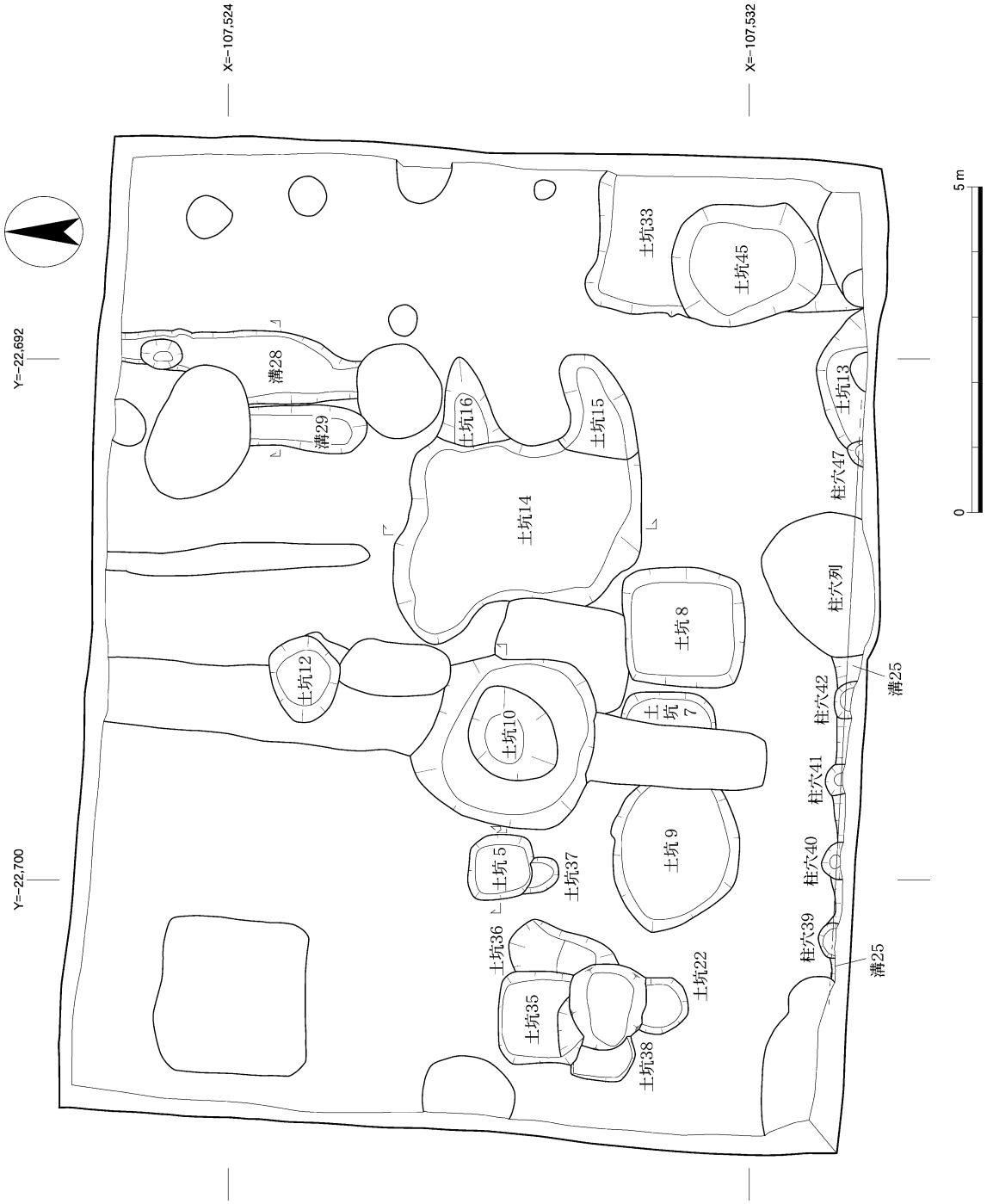


図6　室町時代後期（16 世紀中葉）から江戸時代初期（17 世紀初頭）遺構平面図（1：100）

土坑 13　調査区東部南端で北側部分を検出した。南半は調査区外である。検出規模は東西約 2.2 m、南北 0.8 m、深さ約 0.2 mを測る。埋土は褐色砂泥である。重複関係から後述する柱穴 47（柱穴列）より古い。遺物は出土しなかった。

溝 25（図 13）　調査区南端で北側部分を検出した。東と西は土坑に切られ、南半は調査区外である。検出規模は東西約 5 m分、幅約 0.5 m、深さ約 0.3 mを測る。埋土は褐色砂泥である。何

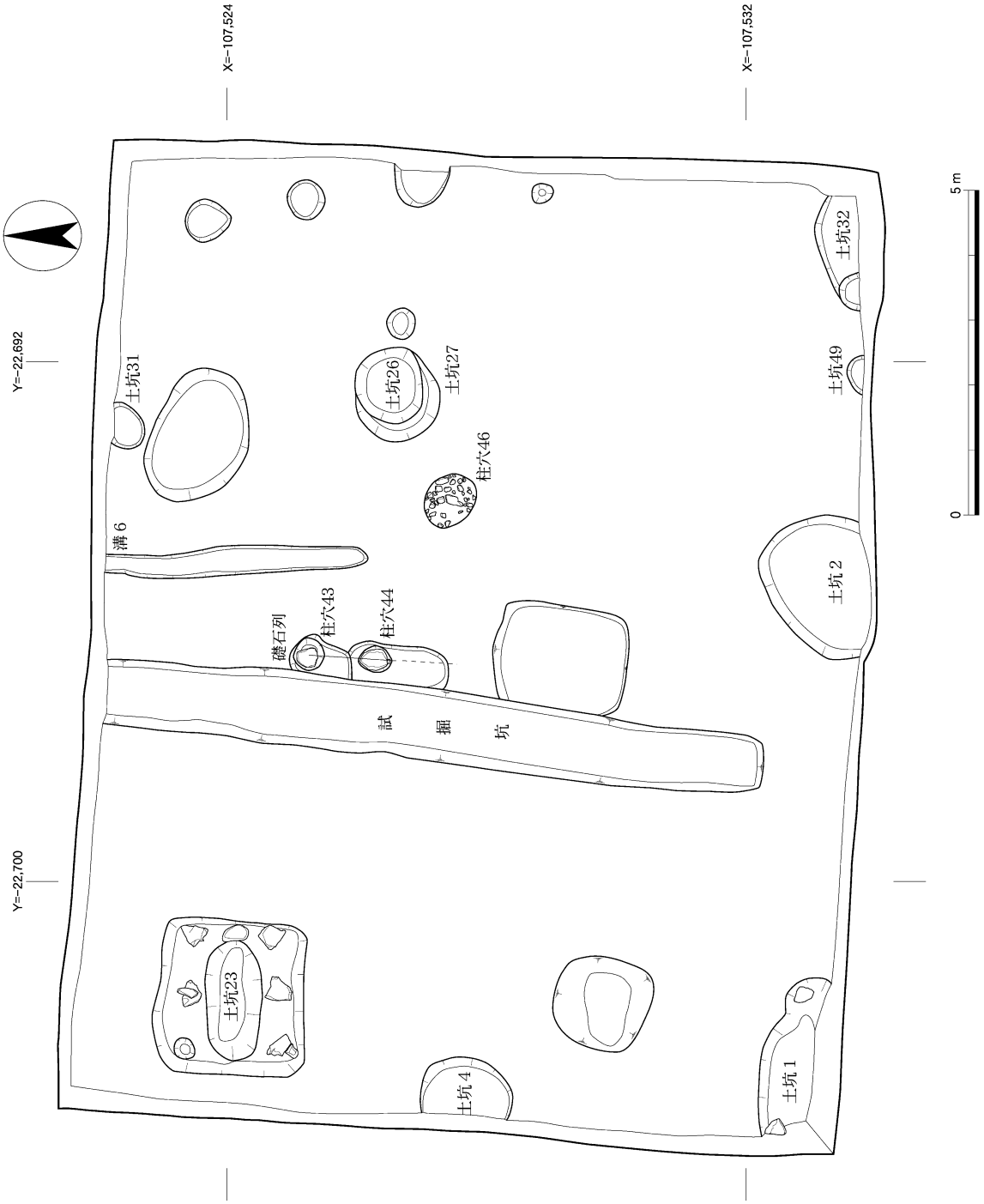
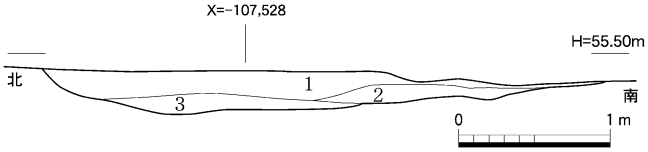


図７　江戸時代遺構平面図（１：100）

らかの区画施設と考えられる。16 世紀中葉の土器が出土した。

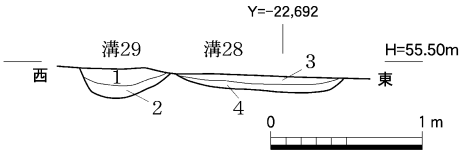
溝 28（図９） 調査区北東部で検出した。西側および南側は土坑に切られ、北は調査区外に延びる。検出規模は南北約 3.7 m分、幅 0.5 ～ 1.1 m、深さ約 0.1 mを測る。埋土は暗褐色～黒褐色砂泥である。16 世紀中葉の土器が出土した。

溝 29（図９） 調査区北東部で溝 28 の西側に隣接し検出した。北側は土坑に切られる。検出規



1　10YR3/4 暗褐色砂泥　径3～15㎝の礫・土師器中量混
2　7.5YR3/2 黒褐色砂泥　炭・土師器少量混
3　7.5YR3/3 暗褐色砂泥　径5～10㎝の礫少量混

図８　土坑 14 断面図（１：50）



1　10YR3/2 黒褐色砂泥　径3～5㎝程の礫少量、土師器片微量混
2　10YR3/3 暗褐色砂泥　径1～2㎝程の礫少量混
3　7.5YR3/2 黒褐色砂泥　径3～5㎝程の礫少量、土師器片微量混
4　10YR3/3 暗褐色砂泥　径1～2㎝程の礫少量混

図９　溝 28・29 断面図（１：50）

模は南北約 1.8 m分、幅 0.6 ～ 0.7 m、深さ約 0.2 mを測る。埋土は暗褐色～黒褐色砂泥である。16 世紀中葉の土器が出土した。

土坑７　調査区中央部南寄りで東側部分を検出した。西側は攪乱で壊されている。検出規模は南北約 1.4 m、東西幅約 0.5 m以上あり、深さ約 0.2 mを測る。埋土は褐色砂泥である。16 世紀後葉の土師器が出土した。

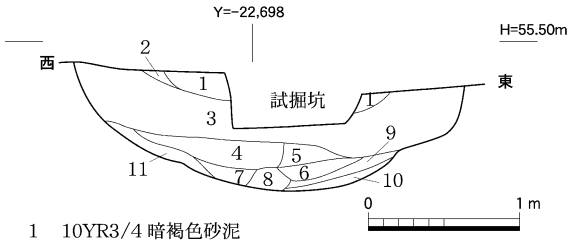
土坑８　調査区中央部南寄りで検出した。検出規模は一辺 1.5 ～ 1.8 m、深さ約 0.2 mを測り、方形である。埋土は暗褐色砂泥である。16 世紀後葉の土師器が出土した。

土坑９　調査区西側南寄りで検出した。東端が攪乱により壊されている。検出規模は南北約 2.0 m、東西約 2.5 m、深さ約 0.1 mを測り、楕円形である。埋土はにぶい黄褐色砂泥である。16 世紀後葉の遺物が出土した。

土坑 10（図 10）　調査区中央部で検出した。検出規模は径 2.6 ～ 2.8 m、深さ約 0.8 mを測り、楕円形である。埋土は暗褐色～黒褐色砂泥が主体である。下層から 16 世紀後葉～ 17 世紀初頭の土器が出土した。

土坑 33　調査区南東部で検出した。東側は調査区外に広がり、南側は土坑に切られる。検出規模は南北約４m、東西約２m、深さ約 0.2 mを測り、南北の長方形である。埋土は暗褐色砂泥である。16 世紀後葉～ 17 世紀初頭の土師器が出土した。

土坑 45　土坑 33 の下層で検出した。検出規模は東西約 1.9 m、南北約 2.3 m、深さ約 0.3 mを測り、楕円形である。埋土は黒褐色砂泥である。16 世紀後葉の土師器が出土した。



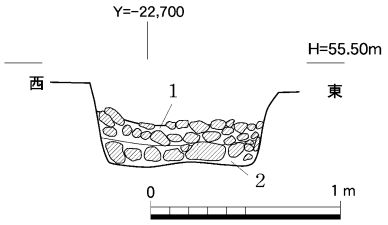
1　10YR3/4 暗褐色砂泥
2　10YR2/3 黒褐色砂泥
3　10YR3/3 暗褐色砂泥
4　7.5YR2/3 極暗褐色砂泥　土師器少量混
5　10YR3/3 暗褐色砂泥
6　10YR3/4 暗褐色砂泥
7　7.5YR3/2 黒褐色砂泥　土師器少量混
8　10YR3/3 暗褐色砂泥
9　10YR4/4 褐色砂泥
10　10YR3/4 暗褐色砂泥
11　7.5YR4/2 灰褐色砂泥

図 10　土坑 10 断面図（１：50）

土坑 22　北側を攪乱により壊されている。検出規模は径約 0.9 m、深さ約 0.2 mを測り、円形である。埋土は暗褐色砂泥である。遺物は出土しなかった。

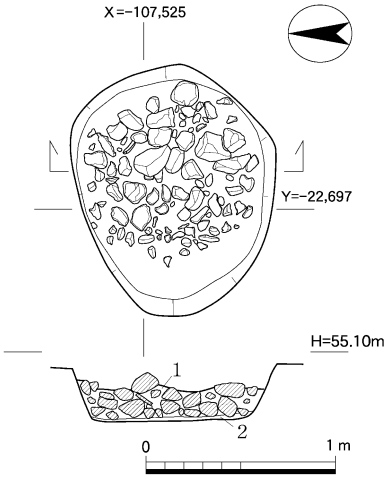
土坑 35　南側を攪乱により壊されている。検出規模は一辺約 1.4 m、深さ約 0.5 mを測り、方形である。埋土は極暗褐色砂泥である。16 世紀後葉～ 17 世紀初頭の土師器が出土した。

土坑 36　西側を土坑 35 に切られている。



1　7.5YR2/2 黒褐色砂泥
　径3～7㎝程の礫多量混
2　10YR3/2 黒褐色砂泥　やや粘質
　径10～15㎝程の礫多量混

図 11　土坑 5 断面図（1：40）



1　10YR3/3 暗褐色砂泥　粘質
2　10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥

図 12　土坑 12 実測図（1：40）

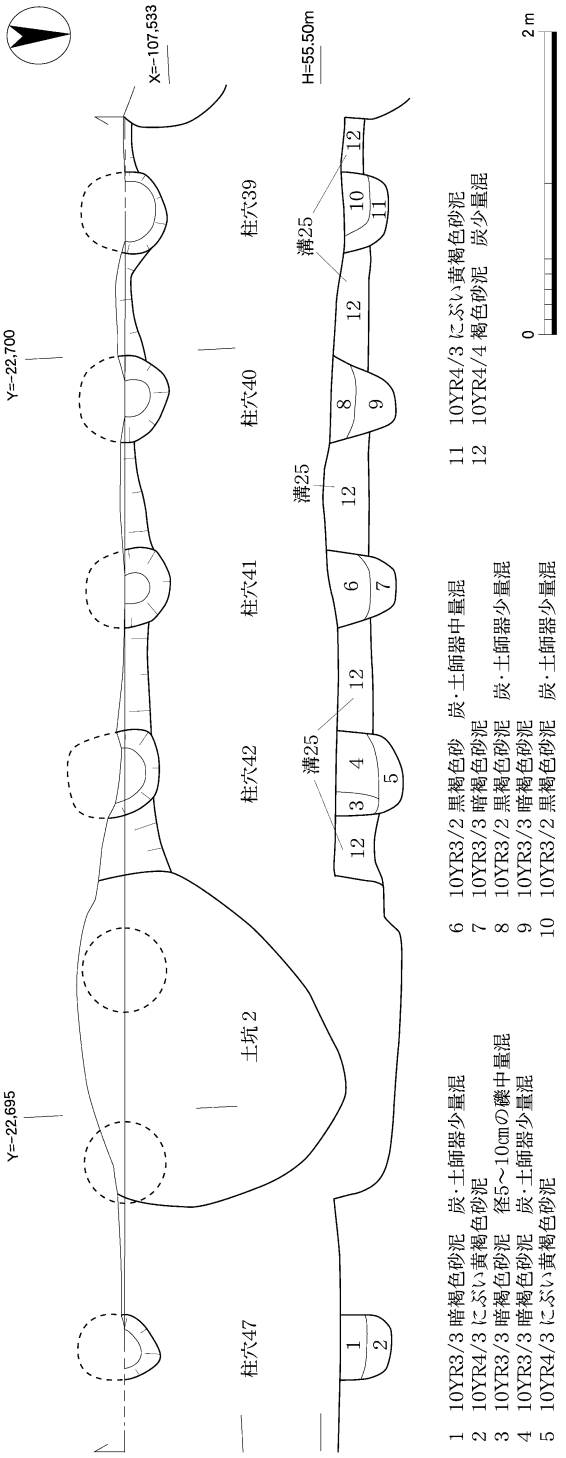


図 13　柱穴列・溝 25 実測図（1：50）

検出規模は径 0.7 ～ 1.7 m、深さ約 0.3 m を測り、楕円形である。埋土は黒褐色砂泥で小礫が混じる。土師器小片が出土した。

土坑 37　北側を土坑 5 に切られている。検出規模は短径約 0.5 m、深さ約 0.4 を測り、楕円形である。埋土は暗褐色砂泥である。16 世紀後葉～ 17 世紀初頭の土師器が出土した。

土坑 38　東側を攪乱により壊されている。検出規模は南北約 1 m、東西約 0.7 m、深さ約 0.15m を測り、方形である。埋土は黒褐色砂泥である。遺物は出土しなかった。

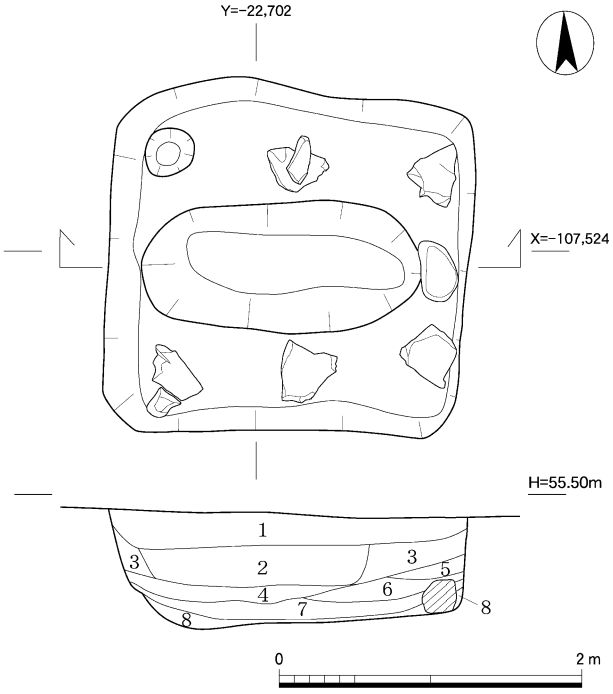
土坑 5（図 11、図版 2 - 2）調査区中央部西寄りで検出した。検出規模は一辺約 1 m、深さ 0.4 mを測り、隅丸方形である。埋土は黒褐色砂泥に 0.05 ～ 0.2 mの河原石が密に詰まる。16 世紀後葉～ 17 世紀初頭の土器が出土した。

土坑 12（図 12、図版２- １） 調査区中央部北寄りで検出した。検出規模は径 1.1 ～ 1.3 m、深さ約 0.3 mを測り、楕円形である。埋土は暗褐色～黒褐色砂泥に 0.01 ～ 0.2 mの河原石が密に詰まる。16 世紀後葉～ 17 世紀初頭の土器が出土した。排水施設の可能性がある。

柱穴列（柱穴 39 ～ 42･47）（図 13､図版１- ２） 調査区南端で東西約 7.5 mにわたって検出した。東部は土坑にこわされているが 6 間分が復元できる。方向は東に向かって約 3.1 度南に振れる。いずれも柱穴の北半を検出し、南半は調査区外である。柱間は 1.25 m前後である。柱穴の検出規模は径 0.5 ～ 0.6 m、深さは 0.3 ～ 0.45 mを測る。埋土はにぶい黄褐色砂泥および暗褐色～黒褐色砂泥である。前述の溝 25 を掘り込み、ほぼ同方向である。区画施設の可能性が高い。16 世紀後葉～ 17 世紀初頭の遺物が出土した。

（４）江戸時代の遺構（図７）

土坑 23（図 14、図版２） 調査区北西部で検出した。検出規模は長辺約 2.4 m、短辺約 2.2 m、深さ約 0.8 mを測り、東西の長方形である。底部壁際に上面の平らな径 0.2 ～ 0.4 mの花崗岩 6 石を据えている。これらの高さの誤差は 5 ㎝内におさまる。これらは礎石であろう。北西隅の 1 石は抜き取られており、径約 0.3 m、深さ約 0.1 mの抜き取り穴を検出した。埋土上層は黒褐色～暗褐色砂泥であり、瓦が多量に混じる。下層はにぶい黄褐色～黒褐色砂泥である。穴蔵と考える。最下層からは 17 世紀初頭の土器、上層からは 18 世紀の土器が出土した。



1　10YR2/3 黒褐色砂泥　径2～4㎝の礫少量、炭・土師器少量混
2　10YR3/2 黒褐色砂泥　瓦多量混
3　10YR3/3 暗褐色砂泥　土師器少量混
4　10YR3/3 暗褐色砂泥　10YR4/4 褐色粘質土ブロック混
5　10YR3/3 暗褐色砂泥　瓦多量混
6　10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
7　10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥　径6～15㎝の礫多量、瓦中量混
8　10YR3/2 黒褐色砂泥　粘性あり

図 14　土坑 23 実測図（１：50）

土坑１　調査区南西隅で遺構の北東側部分のみを検出した。西側と南側は調査区外である。検出規模は東西約 2.5 m、南北約 1.0 m、深さ約 0.75 mを測る。底部壁際で、上面の平らな径 0.25 ～ 0.35 mの花崗岩 2 石を据えている。これらは礎石であろう。埋土は暗褐色～にぶい黄褐色砂泥である。この遺構は穴蔵の一部と考える。18 世紀の土師器が出土した。

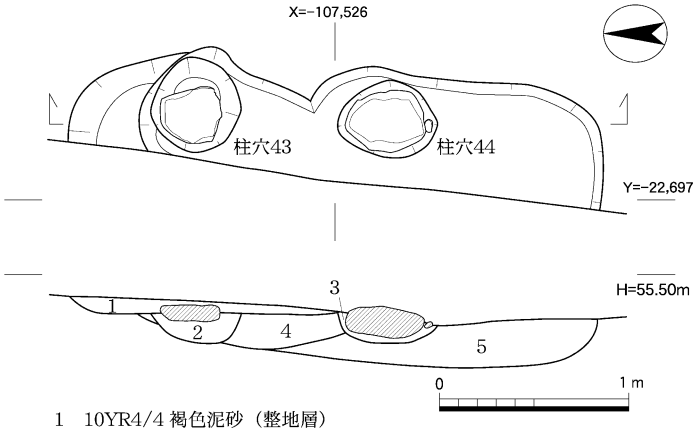
土坑２　調査区南端中央部で北側部を検出した。南側は調査区外である。検出規模は径約 2.2 m、深さ約 0.4 mを測り、楕円形である。埋土は暗褐色～黒褐色砂泥である。17 世紀の土器が出土した。

土坑 26　調査区北東部で検出した。検出規模は径約 1.1 m､深さ約 0.1 mを測り、ほぼ円形である。埋土は暗褐色砂泥に小

礫が中量混じる。17 世紀前半の土器と硯が出土した。

土坑 27　調査区北東部で検出した。東側の大部分を土坑 26 に切られる。検出規模は径 1.3 m、深さ約 0.1 mあり、ほぼ円形である。埋土は暗褐色砂泥である。17 世紀前半の土器が出土した。

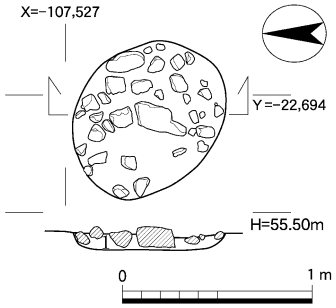
礎石列（図 15、図版２）　調査区中央部北側で検出した。一辺 0.2 ～ 0.3 mの不定形の花崗岩（柱穴 43）と径 0.35 ～ 0.4 mの楕円形状の河原石（柱穴 44）が南北に並び、柱間は約 1.1 m である。埋土は暗褐色砂泥である。下層の土坑から江戸時代の瓦が出土した。重複関係などから 17 世紀の遺構と考える。



1　10YR4/4 褐色泥砂（整地層）
2　10YR3/4 暗褐色砂泥　径1～2㎝の礫が多量、瓦微量混（柱穴43）
3　10YR3/4 暗褐色砂泥　径1～2㎝の礫が多量混（柱穴44）
4　10YR2/2 黒褐色砂泥　径3～7㎝の礫が少量混（土坑11）
5　10YR3/3 暗褐色砂泥　径3～10㎝の礫が少量混（土坑34）

図 15　礎石列実測図（柱穴 43・44、１：40）

柱穴 46（図 16、図版２）　調査区中央部東側で検出した。上面の平らな一辺 0.1 ～ 0.3 mの長方形の花崗岩１石があり、その周囲に径 0.1 ～ 0.2 mの礫多数が詰め込まれている。根固め石と礎石の可能性がある。埋土は黒褐色砂泥である。重複関係などから 17 世紀の遺構と考える。



1　10YR3/2 黒褐色砂泥　径10～20㎝の礫多量、土師器少量混

図 16　柱穴 46 実測図（１：40）

土坑４（図 17）　調査区西端中央部で東半を検出した。検出規模は径約 1.4 mの円形で、深さ約 0.9 mを測る。埋土は黒褐色砂泥に径 0.1 ～ 0.3 mの河原石が密に埋まる。排水施設の可能性がある。18 世紀の土器が出土した。

図 17　土坑４（東から）

土坑 32　調査区南東隅で北側を検出した。東部と南部は調査区外である。検出規模は径 1.7 m以上、深さは約 0.3 mを測る。埋土は暗褐色～黒褐色砂泥である。18 世紀の土器が出土した。

溝６　調査区中央部北側で検出した。北は調査区外に延びる。検出規模は南北約４m分、幅 0.3 ～ 0.45 m、深さ 0.05 mを測る。埋土は黒褐色砂泥である。耕作溝であろう。調査区北壁断面の層序から 19 世紀の遺構と考える。

４．遺　　物

（１）出土遺物の概要

今回の調査の結果、整理箱にして 21 箱の遺物が出土した。出土遺物の大半は、室町時代後期（16 世紀中葉）から江戸時代のものである。それ以外の時期のものは、古墳時代の土師器小片が少量出土した。また平安時代後期から室町時代後期（16 世紀前葉）の小片が各々の遺構から少量出土した。遺物の内容は土器類が約４割を占め、残りは江戸時代の瓦類が大半である。その他に、石製品、金属製品、銭貨などがある。

平安時代後期から室町時代後期（16 世紀前葉）の出土遺物は、小片のため図示できないが、平安時代後期のものには瓦、鎌倉時代のものには須恵器鉢・甕、瓦器椀・羽釜、焼締陶器には常滑甕、輸入陶磁器白磁の椀皿類、青白磁小片、室町時代（16 世紀前葉まで）のものには、土師器皿・火鉢、瓦器羽釜、施釉陶器には美濃瀬戸皿、焼締陶器には常滑甕・備前甕がある。輸入陶磁器には青磁・白磁の椀皿類がある。

室町時代後期（16 世紀中葉）から江戸時代初期（17 世紀初頭）の出土遺物には、土師器皿・火鉢・羽釜、瓦器鍋・火鉢、中国産染付磁器椀皿類、施釉陶器には美濃瀬戸椀皿類・信楽擂鉢・志野椀皿類、焼締陶器には信楽鉢・備前甕、瓦類には平瓦、軒丸瓦、道具瓦がある。その他に金属製品、銭貨、壁土がある。

江戸時代の出土遺物には、土師器皿・火鉢・焙烙、瓦器鍋・火鉢、施釉陶器には美濃瀬戸椀皿類・唐津椀・信楽擂鉢および鉢・京焼椀、焼締陶器には備前甕・信楽擂鉢、土製品土人形、瓦類には平瓦・丸瓦・軒丸瓦・軒平瓦・磚・道具瓦・袖瓦・桟瓦がある。大半が土坑 23 から出土した。石製品には硯・砥石がある。

表２　遺物概要表

<table>
<tr><th>時　代</th><th>内　　容</th><th>コンテナ箱数</th><th>Ａランク点数</th><th>Ｂランク箱数</th><th>Ｃランク箱数</th></tr>
<tr><td>古墳時代</td><td>土師器</td><td rowspan="2">２箱</td><td></td><td rowspan="2">１箱</td><td rowspan="2">１箱</td></tr>
<tr><td>平安時代後期
～室町時代後期
（16世紀前葉）</td><td>土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、焼締陶器、施釉陶器、瓦類</td><td></td></tr>
<tr><td>室町時代後期
(16世紀中葉)
～江戸時代初期
（17世紀初頭）</td><td>土師器、瓦器、輸入陶磁器、焼締陶器、施釉陶器、瓦類、金属製品、銭貨、壁土</td><td>９箱</td><td>土師器13点、焼締陶器２点、施釉陶器５点、軒丸瓦１点、道具瓦１点、金属製品１点、銭貨１点</td><td>３箱</td><td>３箱</td></tr>
<tr><td>江戸時代</td><td>土師器、瓦器、輸入陶磁器、染付、施釉陶器、瓦類、石製品、土人形</td><td>16箱</td><td>土師器７点、施釉陶器１点、石製品１点</td><td>３箱</td><td>12箱</td></tr>
<tr><td>合　計</td><td></td><td>25箱</td><td>33点（２箱）</td><td>７箱</td><td>16箱</td></tr>
</table>

※　コンテナ箱数の合計は、整理時に遺物を抽出したため、出土時より４箱多くなっている。

ここでは図示できる室町時代後半（16 世紀中葉）以降の土器を順を追って述べ、その他の遺物に関しては種類ごとに記述して行く。なお、土器の口径は復元値であり、土器の型式名と年代については小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」（『研究紀要』第３号 （財）京都市埋蔵文化財研究所　1996 年）に準拠した。

（２）室町時代後期（16 世紀中葉）から江戸時代初期（17 世紀初頭）の土器類（図 18、図版３）

土坑 14 出土土器 （１～３）は土師器白色系皿Ｓｂである。口径 8.7 ～ 9.4 ㎝、底部内面は平らで体部から口縁部はわずかに外反し広がる。３の口縁には黒色付着物が認められ、灯明皿として使用されたものである。（４～６）は土師器白色系皿Ｓである。口径 11.2 ～ 13.2 ㎝、底部内面には凹状圏線があり、体部から口縁部はわずかに外反して広がり、口縁端部は小さく丸く収まる。Ｘ期中に属する。

溝 25 出土土器 （７）は信楽擂鉢である。口径 34.0 ㎝、体部は広がり、口縁部は外反する。内面には４～６㎜間隔で４本を１単位とする擂目があり、４条残る。内面は使用のために平滑化する。胎土は灰白色で径３㎜前後の白色粒が中量混じる。16 世紀中葉に比定できる。

土坑 10 出土土器 （８～ 10）は器壁がやや肥厚した土師器皿Ｓである。８は口径 10.5 ㎝、底部内面には凹状圏線があり、体部から口縁部は広がり、口縁端部は丸く収まる。９・10 は口径

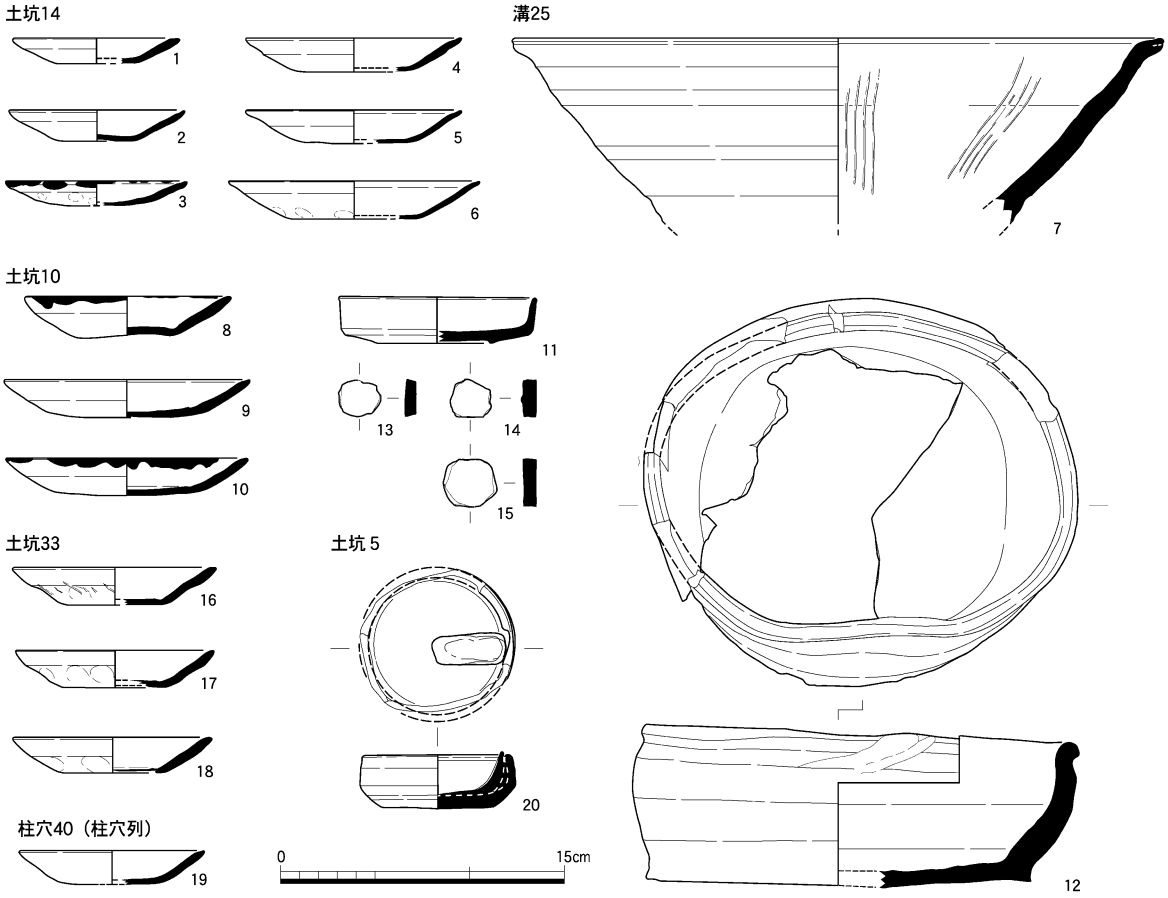


図 18　室町時代後期（16 世紀中葉）から江戸時代初期の土器実測図（１：４）

12.4 ～ 12.6 ㎝、体部は緩やかに内湾して広がり、口縁部はわずかに外反し、小さく丸く収まる。8・10 の口縁には黒色付着物が認められ、灯明皿として使用されたものである。Ⅺ期古～中に属する。(11) は施釉陶器灰釉皿である。口径 10.3 ㎝、体部はほぼ直立し、口縁部に向かって器壁は薄くなり、端部はわずかに外反し丸く収まる。高台は底部を削り成形する。底部外面のわずかな削出し部以外は釉が施される。(12) は焼締陶器信楽鉢である。口径 22.8 ㎝、体部は内湾してやや広がり、口縁部は外反して丸く収まる。体部から口縁部にかけて意図的に歪みを施している。胎土は灰白色で密であり、径 3 ㎜前後の白色粒が多く混じる。表面はにぶい褐色を呈する。茶道具の建水か。16 世紀後葉に比定できる。(13 ～ 15)は施釉陶器志野の体部破片を加工した玩具である。径 1.7 ～ 2.7 ㎝、厚さ 0.5 ～ 0.8 ㎝を測る。

土坑 33 出土土器 (16 ～ 18) は器壁のやや肥厚した土師器皿Ｓである。口径 10.2 ～ 10.4 ㎝、底部内面には凹状圏線があり、体部から口縁部は広がり、口縁部は器壁が肥厚し、端部は丸く収まる。Ⅺ期古～中に属する。

柱穴 40 (柱穴列) 出土土器 (19) は土師器白色系皿Ｓｂである。口径は 9.6 ㎝、底部内面は平らで、体部から口縁部は広がる。端部は丸く収まる。Ⅺ期古に属する。

土坑 5 出土土器 (20)は施釉陶器の瀬戸美濃灯明皿である。口径 7.8 ㎝、底部外面は平らに削る。体部は内湾し、外面の中程に稜線を形成する。口縁端部は上から押さえて平らにする。内面と体部外面上半に施釉する。口縁部上面はケズリを施し、釉ハギ状である。16 世紀後葉～ 17 世紀初頭に比定できる。

(3) 江戸時代の土器類 (図 19、図版 3)

土坑 23 出土土器 (21 ～ 23)は土師器皿Ｓである。口径は 11.3 ～ 13.9 ㎝、底部内面には凹状圏線があり、体部から口縁部は広がり、端部はツマミ、丸く収まる。Ⅺ期古～中に属する。これらは下層から出土した。(24) は土師器皿Ｎｒである。口径は 5.3 ㎝、底部から口縁部へ内湾して立ち上がり、口縁端部はナデで丸く収まる。(25) は土師器皿Ｓである。口径は 9.9 ㎝、底部内面には幅約 1 ㎜の凹状圏線がある。底部から口縁部へ緩やかに内湾して立ち上がり、端部はツマミ、丸く収まる。口縁には黒色付着物が認められる。Ⅻ期に属する。24･25は上層から出土した。

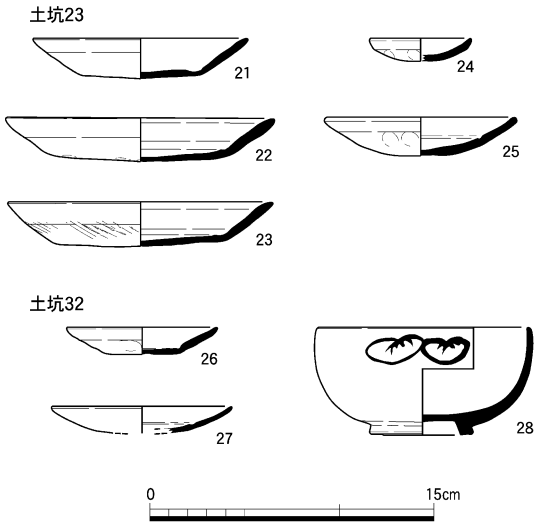


図 19　江戸時代の土器実測図 (1 : 4)

土坑 32 出土土器 (26・27) は器壁の薄い土師器皿Ｓである。口径は 7.9 ㎝・9.4 ㎝、底部内面には幅約 1 ㎜の凹状圏線がある。26 は底部から体部は外反して立ち上がり、口縁部はわずかに内湾し、ツマミ、まるく収まる。27 は底部から口縁部へ緩やかに内湾して立ち上がり、端部

はツマミ、丸く収まる。 期に属する。(28) は施釉陶器の京焼椀である。口径は 11.1 ㎝、底部から体部は内湾し、口縁部へ立ち上がる。端部はツマミ、丸く収まる。高台は削り出し、外反する方形状断面である。体部の口縁部近くには果物と思われる鉄絵が 2 個ある。底部外面と高台およびその周囲は露胎である。18 世紀に比定できる。

(4) 瓦類 (図 20、図版 3)

(29) は右巻きの三巴文軒丸瓦である。出土したものの中では最大級であり、径約 18 ㎝を測る。巴の尾が圏線に接し、外区には珠文があり 16 個に復元できる。土坑 33 から出土した。

(30) は道具瓦である。幅約 17.5 ㎝、厚さ 2.2 ～ 3.4 ㎝、長さは 15 ㎝以上である。文様は枝と葉であろう。棟の飾り瓦か。土坑 44 から出土した。

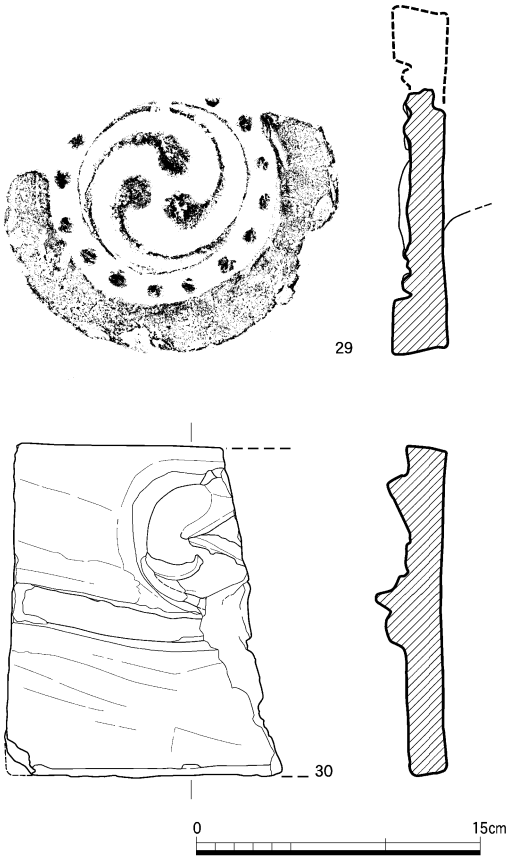


図 20　瓦類拓影・実測図 (1 : 4)

(5) その他の遺物 (図 21 ～ 23、図版 3)

石製品 (31) は硯である。幅 4.7 ～ 4.8 ㎝、長さ 10.5 ㎝、厚さ 1.2 ～ 1.4 ㎝を測る。陸部には使用痕が認められる。裏面に多くの釘書銘がある。その中で判読できそうなものは、「高□石」(高島石か)、御□石 (御枕石か)、「カ」、「ソ」である。その他に家の絵の様なものがある。土坑 26 から出土した。

金属製品 (32) は刀装具のハバキである。長さ 2.6 ㎝、幅 0.3 ～ 1.0 ㎝、重さ 9.5 g を測る。幅約 1.5 ㎝の板状金具を断面三角状に折り曲げて接合する。材質は銅であろう。土坑 10 から出土した。

銭貨 (33) は「元豊通寶」(北宋、初鋳 1078 年) である。径 2.4 ㎝、重さは 2.4 g を測る。土坑 45 から出土した。

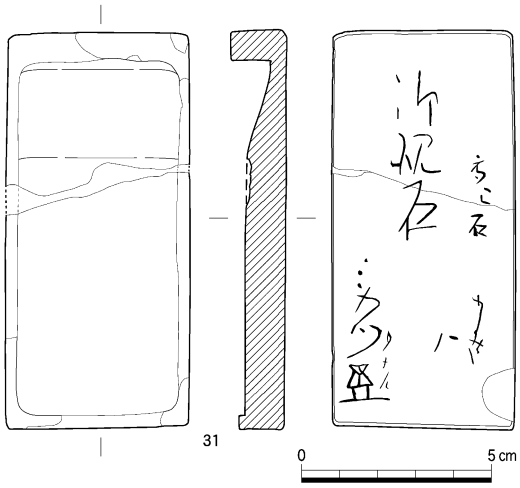


図 21　硯実測図 (1 : 2)

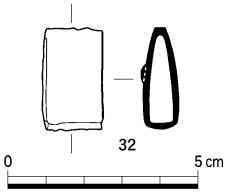


図 22　ハバキ実測図 (1 : 2)

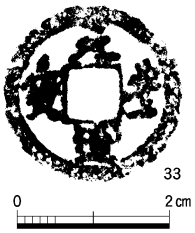


図 23　銭貨拓影 (1 : 1)

5．まとめ

調査地は中世に南北の室町通を中心に上京、下京として市街地が発達した上京の西部にあたる。当地でその上京遺跡に該当する室町時代後期の遺構を検出できたことは、大きな成果である。また江戸時代の遺構を検出したことも調査地の変遷を知る上で貴重な成果である。

検出できた主な遺構は、多種の土器や一定量の瓦が出土した土坑 10、土師器皿が多量に出土した土坑 14、そして溝 25 と柱穴列などであり、その時期は室町時代後期（16 世紀中葉）から江戸時代初期である。上京は、織田信長によって元亀４年（1573）４月、「上京焼き打ち」に遭い、町が焼亡する。そののち同年７月に復旧が始まる。このときに調査地一帯も整備されたはずであり、検出した遺構はそれらに伴い、廃棄されものや新たに作られたものと考えられる。また、当地は『洛中絵図　寛永後万治前[1)]』によると本阿弥家所領地である（図 24）。本阿弥家は刀剣の磨ぎ・拭い・目利きをつとめた家系であり、室町時代後期には上層町衆となる。土坑 10 から出土した刀装具ハバキや茶道具と思われる土器類は、本阿弥家との関連性も考えらよう。

江戸時代の遺構は、町屋遺構のように過密に重複せず、本阿弥家もしくはその後身の大規模住宅の一部であろう。

現代盛土の直下には、近世から近代の耕作土がみられる。道路に面した町屋は近代まで維持されたのに対し、町屋裏にあたる調査地付近は、やがて空閑地となり、畑などに利用されたと考えられる。

なお、出土遺物として平安時代後期から室町時代後期（16 世紀前葉）の遺物が少量ながら出土していることから、「上京」以前の遺構が付近に展開したことが考えられる。

註

１）『洛中絵図　寛永後万治前』（京都大学附属図書館蔵　中井家旧蔵）臨川書店　1978 年。

参考文献

佐和隆研ほか『京都大辞典』株式会社淡交社　1984 年

高橋康夫『洛中洛外　環境文化の中世史』株式会社平凡社　1988 年

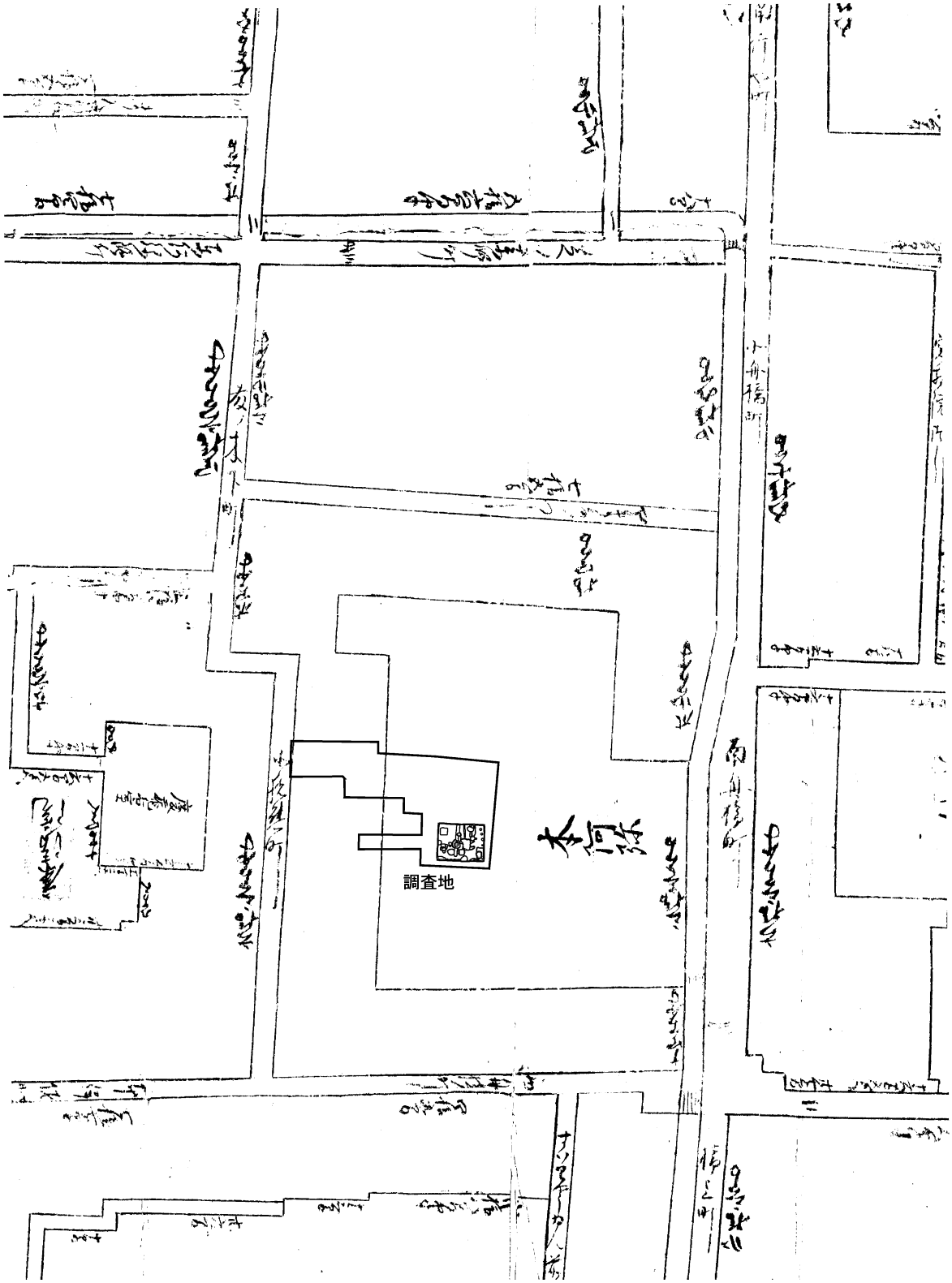


図 24『洛中絵図　寛永後万治前』と調査地
『洛中絵図　寛永後万治前』（京都大学附属図書館蔵）の一部を調整して加筆した。

図　　版

報　告　書　抄　録

ふ り が な	かみぎょういせき
書　　名	上京遺跡
シ リ ー ズ 名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
シリーズ番号	２０１０－２
編 著 者 名	布川豊治
編 集 機 関	財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
所　在　地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
発　行　所	財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
発 行 年 月 日	西暦2010年６月30日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
上京遺跡（かみぎょういせき）	京都市上京区（きょうとしかみぎょうく）堀川通上立売（ほりかわどおりかみたちうり）下る北舟橋町（さがるきたふなはしちょう）860-1、860-3、今出川通大宮（いまでがわどおりおおみや）一丁東入北猪熊町（いっちょうひがしいるきたいのくまちょう）295、297、305	26100	224	35度01分50秒	135度45分05秒	2010年４月19日～2010年５月14日	180㎡	老人ホーム建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上京遺跡	都城跡	室町時代後期（16世紀中葉）～江戸時代初期（17世紀初頭）	土坑、溝、柱穴、柱穴列	土師器、瓦器、輸入陶磁器、焼締陶器、施釉陶器、瓦類、金属製品、銭貨、壁土	検出した遺構群は本阿弥屋敷に関連するものと考えられる。
		江戸時代	土坑、溝、柱穴、礎石列	土師器、瓦器、輸入陶磁器、染付、施釉陶器、瓦類、石製品、土人形	

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2010-2

上　京　遺　跡

発行日　2010 年 6 月 30 日

編　集
発　行　財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

住　所　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1
〒 602-8435　℡ 075-415-0521
http://www.kyoto-arc.or.jp/

印　刷　三星商事印刷株式会社

住　所　京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地
〒 604-0093　℡ 075-256-0961